

宮沢賢治と女性*

朴 京 姪**

Ⅰ 要旨文 Ⅰ

本研究では、賢治の一生を通じて登場する女性という存在に照明をあて、賢治の認識の中での女性像とは何か、また、彼の作品にどのような影響を及ぼしているのかを考察する。

そして、賢治の人生に大きな影響を及ぼしたと見ることができる女性を四人に集約した。その四人の女性は、二人の家族と二人の恋人に分類することができる。二人の家族とは、生涯賢治の心強い支えになってくれた母イチと精神的に頼っていた2歳年下の妹トシ子である。また二人の恋人とは、賢治が18歳の時(1914年)に入院した岩手病院で出会った初恋の女性、看護師の高橋ミネと賢治が32歳の時(1928年)に縁談のあった伊藤チエである。

母イチの教えは、賢治の有名な詩「雨にも負けず」の源流でもあり、優れた母の影響が賢治の思考を形成する下地となった。自分と同じ信仰を持つトシ子は、宗教的傾向が強く現れる賢治にとって人生のパートナー的な位置を占めており、賢治の人生に大きな意味を付与する。トシ子は、賢治の生涯と創作活動に深く関係しているため、トシ子の死後、賢治が創作した3編の詩を紹介し、彼の女性像について深察した。

賢治は、肥厚性鼻炎の手術のために岩手病院に入院することになる。入院中に会った看護師がミネであり、初恋の人である。初めて両親に結婚の相手として話した人物でもあり、作品の中で彼の心境を露呈している。

賢治の友人である伊藤七雄は、賢治に自分の妹であるチエとのお見合いを進める。実際にお見合いで出会った二人は、お互いに惹かれあった。その当時の感情を賢治は、自分の作品に表現している。しかし、結婚の話まで進展する前に七雄が他界し、二人は別々の場所でそれぞれの人生を送ることになる。

賢治は結婚しようとしたが、それにもかかわらず結婚しなかった理由として、母と妹の影響、初恋のミネと最後の恋人チエとの成就することのなかった縁、また、健康上の理由、農民への愛と宗教的に昇華された情熱、彼の人生の信念と目標が日常の幸せより他人のための生活の中に存在していた部分について研究した。

【キーワード】 女性、母イチ、トシ子、高橋ミネ、伊藤チエ

* 이 연구는 2014학년도 단국대학교 대학 연구비 지원으로 연구되었음.

** 단국대학교 강의전담 조교수 / 12122346@dankook.ac.kr

Ⅰ 목 차 Ⅰ

Ⅰ.はじめに	Ⅴ. 賢治の初恋と最後の愛
Ⅱ. 先行研究	Ⅵ. 結婚しない賢治
Ⅲ. 賢治の性と愛	Ⅶ. おわりに
Ⅳ. 賢治の母と妹	

Ⅰ.はじめに

本研究では、宮沢賢治(1897~1933)の一生を通じて登場する女性に照明を当て、賢治の認識の中での女性像の位置や彼の作品の中で女性がどのように表現され、どのような影響を与えているのかなどに対して考察する。

賢治の女性像を調べると性の認識と女性に対する意識の差はある。性について関心がなかったと言いきれない様々な理由があるが、それにも関わらず、女性との交際に積極的ではない賢治の思考を彼の一生と作品を通して研究しようとするものである。

生涯独身を貫いた賢治の一生に登場する女性の中には、彼に影響を与えた女性、別れた女性もいる。本稿では、その中の四人の女性に注目する。

四人の選定基準は、二人の家族と二人の恋人に分類することができる。二人の家族としては、賢治の人生に最も大きな影響を及ぼした女性を選定した。それは、生涯賢治の心強い支えになってくれた母イチと二歳年下だが精神的に頼っていた妹トシ子である。

また、恋人としては、賢治が結婚を考えていた二人の人物に絞った。それは賢治が18歳(1914年)の時、岩手病院に入院した際に出会った初恋の人にあたる看護師のミネ、賢治が32歳(1928年)の時に縁談のあった最後の恋人にあたるチエである。

賢治の人生と彼の作品の世界に影響を与えたこの四人の女性を通じて、賢治が生涯一貫して見せる性と愛に対する意味と結婚に積極的でない理由を探ってみることにする。

Ⅱ. 先行研究

賢治の一生を通じて性と恋人、そして愛という研究テーマは、しばしば言及されている。それは、賢治という作家を研究する者には避けられないテーマであるといっても過言ではないだろう。

また、賢治の思想の中心に位置する問題といっても誇張ではない。賢治の愛と女性との関係について多様

な研究が行われ、特に森莊已池、儀府成一、中村文昭などの多くの研究者によって試みられてきた。

賢治を研究する上で、これらのテーマは、国文学の賢治特集で精密に年報を製作した堀尾青史¹⁾が明らかにしたように、賢治と女性との関係については不正確なため、年報に記載に至らない部分が多かったということが既に論じられている。もちろん、これらの問題は、賢治という作家のみに限られた問題ではないと考える。異性との関係は私生活であるため、公式データが発表されない限り、本人以外には正確に知ることができない。他の多くの作家の研究においても同様な問題になるだろう。

賢治にとって性と愛は賢治自身の意識が宗教的な愛や芸術に昇華しようとした意図があったため、作品との関連性を必然的に展開せざるをえない部分がある。したがって、その思考と表現が現れている作品と比較的に信用できる研究資料を忠実に参考にして考察する。

また、賢治の伝記的な事実と作品を混用するうえでの錯誤はありうるが、作品と伝記を分離して考える方法は追求しないものとする。なぜなら賢治のように宗教、芸術、科学、自然、愛などを一人の人間の問題として受け入れ、自己消化しようとしている作家の伝記と作品は、論理的な必然性の関係で繋がっている部分があるからである。

心理学者であり児童文学研究家の河合隼雄は、トシ子の死後に執筆した賢治の作品「永訣の朝」という詩を読んで、トシ子が賢治のすべてを代弁できる存在であると仮定しても、妹の死を目の当たりにしてこのような詩を詠むことができるだろうかという疑問を持たせると論じている。²⁾ これは、妹であり、恋人であったという前提とともに、同じ病気を患っていた妹に賢治が感じる死の意味は、病気を持たない人とは別の親近感を覚えたのではないかと読み取れる。

賢治とトシ子は、二人とも結核で死亡したが、その感染源は母イチからであることが明らかにされている。その当時、結核は完治することができない不治の病であり、同じ病気を患った三人は、家族の中でも強い連帯感を持っていたことは否めない。³⁾

賢治文学の多様な魅力の一つは、彼の実践的な人生と作品が深い繋がりを持っているところである。これは、頻繁に話題にされているモラルの問題だけではなく、彼の思想の問題であり、芸術上の方法論的な問題である。例えば、彼の後期の作品を解釈する上で、その当時、賢治が力を注いでいた農民活動を理解しない限り、彼の作品を深く把握することは難しい。それに加えて最後に愛したチエとの出会いとも関連性を見つけることは難しい部分がある。したがって、作家の伝記的な事実と作品の関係は深いといえる。⁴⁾

前述のように様々な研究が既になされているが、本研究では、賢治の人生に最も大きな影響を及ぼした女性を4人に絞り、また結婚しなかった理由を考察することで先行研究との差をおき、賢治の伝記的な事実と彼の作品との関連性を中心に研究する。

1) 堀尾青史、「賢治年譜の問題点－堀尾青史に聞く(<特集>宮沢賢治－作品から作品へ、ジャンルからジャンルへ)」『国文学解釈と教材の研究』23(2)、学灯社、1972、pp.169~77.

2) 梅田鉄夫編『宮沢賢治 第10号(記念増大号)－河合隼雄「愛とファンタジーの深層心理」』、洋々社、1990、pp.199~204.

3) 宮沢清六『兄のトランク』、ちくま文庫、1991、p.89

4) 境 忠一、『宮沢賢治の愛』、TOMO選書、1978.

Ⅲ. 賢治の性と愛

賢治にとって性への欲求を女性への関心と解釈することができるのかという疑問を提起する。賢治は、性の欲求、愛の感情、女性、さらに結婚というテーマを賢治の人生観を介してどのように解決し、決定していったのか、伝記的な事実や作品を通して見ることを本研究での焦点とする。

しかし、一般的な思考を持つ男性と賢治をどのような基準で区分して論じるかという疑問も残る。賢治が教師として働いていた花巻農学校の近くに、賢治の妹が卒業した花巻高等女学校がある。その音楽教師である藤原嘉藤治は、賢治に作曲などを教えつつ彼と交流していた。

性欲の乱費は君自殺だよ、い々仕事は出来ないよ。腫だけでい々ぢやないか、触れて見なくなつてい々よ。性愛の墓場迄行かなくともい々よ。⁵⁾

藤原は、賢治が持っているエネルギーのベクトルを女性に向けることを節制し、他の生産的な仕事に使用することを勧めている。彼は、賢治に目に愛でるだけで禁欲を推奨し、肉体関係を制限させている。これは性的な満足より、作品を通した満足感を優先させようとする意図が見られる。しかし、このような内容の手紙に対し賢治は、女性に向かう自分の欲求に全く不自由ないことを手紙で答えている。

おれは、たまらなくなると野原へ飛び出すよ、雲にだつて女性はあるよ、一瞬の類笑みだけでいいんだ。底まで酌み干さなくともいいんだ。香をかいただけで後は創り出すんだな。⁶⁾

このような言葉を藤原に打ち明けた賢治は、自分の性に対する欲求を克己し、それを昇華させようとしたと思われる。雲の中で女性を捜し出し、香りで女性との話を作り出す虚構の世界の中で賢治は感じ満足しようとしていたと解釈することができる。このような虚構の世界は、賢治の作品の中で表現されている。賢治は女性に興味がないのではなく、現実世界の中で女性との関わりを持ち発展させようとしなかったと見ることができる。しかし、賢治が所蔵していた浮世絵の中でも、特に春画においては、積み上げると一尺にもなる。各種の春画の中でも、男女の交合図に興味が高く、収集と鑑賞に大変な熱意を見せたという。それは、賢治がエロスの誕生を告げる象徴的な事件としても見ることができる。⁷⁾

賢治は、他の人のために自分が何をすべきか、自身の希望と願いがどんなものか分からないと悩んでいたが、ある日、突然、東京へ行くことにする。この時期の賢治がトランクいっぱいの童話を書いて東京から花巻に戻った時、弟の清六に「童児こさえる代りに書いたのどもや」⁸⁾という言葉を残す。この有名な言葉は、

5) 押野武志、『童貞としての宮沢賢治』、ちくま新書、2003、p.31.

6) 押野武志、前掲書、p.32.

7) 小倉豊文、『新文芸読本 宮沢賢治「宮沢賢治の愛と性」』、河出書房新書、1996、pp.97~112.

性への欲求、すなわち女性への関心を創作的に昇華させたという意志の表現である。また、夜中に冷水を浴びたというエピソードも残している。したがって、賢治は、性の欲求を自身で解消することもせず、自分自身をコントロールすることができる意志を持っていたと考えられる。そして、賢治は、エネルギーを消耗する範囲を作品に昇華させたのである。

ちひさな自分を割ることのできない / この不可思議な大きな心象宇宙のなかで / もしも正しいねが
ひに燃えて / じぶんとひとと万象といつしよに / 至上福祉にいたらうとする / それをある宗教情操と
するならば / そのねがひから砕けまたは疲れ / じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと / 完全
そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする / この変態を恋愛といふ / そしてどこまでもその方
向では / 決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を / むりにもごまかし求め得ようとする / こ
の傾向を性慾といふ (小岩井農場 パート九)⁹⁾

賢治はこの詩の中で愛の感情を3段階に区分している。それは、宗教情操と恋愛、性欲である。自分自身や他人、すべての森羅万象が、すべて地上最高の幸福に至ることを宗教情操として捉え、最上の段階に置いている。その次の段階として、自分だけのもう一つの魂と完全かつ永久にどこまでも一緒に行こうとする形を恋愛に見た。最後に二人でどこまでも行こうとしている求道的な関係において墮落した傾向を性欲と捉え、最下位としている。

墮落した性欲が最も下位を占められていることから、賢治の作品の中に登場する男女間の愛の物語、または、友情をテーマとした「チュンセとポウセ」、「シグナルとシグナレス」、「銀河鉄道の夜」の登場人物たちを通して、純粋な愛と友情の物語を作品で描写している。

魂の伴侶とどこまでも一緒に行こうとする意識は、「銀河鉄道の夜」のジョバンニとカムパネルラと同じ関係でも象徴されている。賢治にとって妹トシ子は、魂の伴侶に相当する。

IV. 賢治の母と妹

1. 母イチ

賢治の家の家業は、農民を相手に古着を扱う質屋であった。その当時、古着を扱う質屋は、東北地方の貧しい農民の生活を表している。この質屋は、大多数の農民が貧しくて新しい服を購入することができないため、古着を買って着なければならぬ農民を対象としていた。古着を着なければならぬ農民を幼い頃から

8) 中村文昭,『童話の宮沢賢治』,1992, 洋々社, p.6.

9) 『校本宮沢賢治全集』第二巻 pp.87~88.

ら見て育った賢治がのちに農民救済に力を傾けることは、決して偶然ではないだろう。

長男として生まれた賢治が家の家業を継ぐことは、その当時の世情からみて定められた宿命であった。しかし、“世の中が不公平だ。父の家業はいやだ。”¹⁰⁾と反発する。その後、賢治が13歳の時、この先の進路を決定しなければならない時期となり、大きな決断を下すことになる。それは、岩手県所在の盛岡中学校の入学から始まった。中学校に入学しないで家業を継いだなら、詩人、童話作家としての賢治は誕生しなかったかもしれない。祖父の代から続いてきた質屋の家業を長男が継ぐことは当然であったため、祖父が見習いで教育させようとする頃であった。だが、小学校の成績が良かった賢治の将来を考えて、中学校に進学させようとしていた人物が母イチであった。この時の母の決断が賢治の人生を変えたと言える。

母イチは、1908年3月31日から三日間行われた中学校の入学試験を受けるように積極的に後押しした。母の実家は、その当時、花巻地方の財閥で、弟の慶応義塾大学進学に煽られ、自分の息子にさらに上高等教育を受けさせようとする意欲は強くならざるを得なかったであろう。一方、賢治の父政次郎は、賢治が中学校を卒業したら、家業を継承させようと考えていた。賢治の家は、花巻で社会的位置が安定していた。封建制度の残滓が色濃く残っていた明治時代にあつては、家業の継承は、因習であり、かつ長男の権利でもあった。母の積極的な支援がなく、現実にも悩みもなく家業を継いだなら、近代的な自我を確立し、発見するチャンスさえ得られなかったかも知れない。

賢治の作品の中に登場する父と母の姿は、「銀河鉄道の夜」では、お金を稼ぎに行き不在の父、病気のためジョバンニの助けが必要な母、「貝の火」では、主人公ホモイが失明をした時、このようなことはどこでもあり得ることだと勇気を与える父、その横で終始、涙だけ流す母の姿として描かれている。作品の中では強い父とその父に従順するか弱い母の姿である。

しかし、賢治の意識の中に意志と信念を植えつけてくれて勇気を与えたのは、母のイチであるといえる。賢治が子供の頃、母イチが賢治を寝かせながら、“ひとというものは、ひとのために何かしてあげるために生まれてきたの。”¹¹⁾といつも聞かせたと伝えられている。このエピソードは、賢治の思考を形成するのにこれ以上の説明が必要ないほど、彼の作品の中に表現されている。¹²⁾

特筆すべきことは、賢治の有名な詩「雨ニモマケズ」の文中の表現は、このような母イチの教えがその源流になったと判断する。偉大な母の影響が賢治の思考を形成する根幹を成したといえる。

2. 妹トシ子

賢治と妹トシ子が近親相姦の関係であったという話は、長い間語られ、結婚しない理由も妹との関係が大きな影響を及ぼしたとみる見解もある。しかし、現在までの研究の中で肉体的な近親相姦といえる確かな

10) 見田宗介、『宮沢賢治 存在の祭りの中へ』, 2010, 岩波文庫, pp.83-99.

11) 山下聖美, 『宮沢賢治のちから』, 2008, 新潮社, p.23.

12) 竹沢克夫, 『宮沢賢治解説』, 1994, 彩流社, pp.23-59.

証拠を掲げる研究はまだない。したがって、精神的に依存・共存していた血縁関係、それ以上互いに理解し合い、痛みを分かち合った同じ宗教を持った同盟関係のとしての精神的な同伴者関係と見た方が良いという結論に達する。

この結論から、賢治の代表作である「銀河鉄道の夜」の主人公であるジョバンニとカムパネルラの二人は、魂の伴侶としての賢治とトシ子と解釈することができる。もちろん、賢治の同級生で、一緒に寮で生活していた保阪がカムパネルラであるという研究もある。トシ子とは近親相姦、同級生の保阪とは同性愛と解釈するならば、どこまでがフィクションで、どこまでがノンフィクションなのかが証明されていない現時点では否定的に認識するしかない。近親相姦あるいは同性愛であったと解釈しても、それは肉体的な関係ではなく、精神的な関係に過ぎないと賢治を擁護する研究が多数である。近親相姦や同性愛などで賢治の愛、または、恋愛感情を否定的に解釈するのは再考の余地が十分にあるとし、本稿では賢治と妹トシ子の関係を近親相姦という否定的な部分とは先を引いて論じたい。

1917年祖父の臨終を一人で看取り、1922年の妹トシ子の死を経験した賢治は、彼の心境を作品の中に残しており、特に妹トシ子の死は、賢治文学の大きな転換点となり、精神世界の変化にも大きな影響を与えた。賢治に臨死体験や幽体離脱の経験があったと推定する場合、「銀河鉄道の夜」の世界がもっと合理的かつ現実的な世界のファンタジー童話として理解するのに説得力を持つようになる。身近な人の死を通して得た体験は、宗教的な意識の転換のきっかけになったと解釈できる。このような意識の転換には、トシ子の死が重大な契機であったことが作品を通して確認できる。

1922年11月27日、賢治は、3編の詩を残している。「永訣の朝」¹³⁾、「松の針」¹⁴⁾、「無声慟哭」¹⁵⁾がそれである。この日付は、トシ子が他界した日であるため、トシ子との関係を除いては論じ難い詩である。

「永訣の朝」でトシ子は賢治に“あめゆじゆとてちてけんじや”とお願いして賢治は妹の願いを叶えるために“これらふたつのかけた菟耳”を持って外に行くことになる。ここで考えなければならない部分は、なぜ二つを持って行ったのだろうかという疑問が生じる。簡単に考えるなら、たくさん持ってこようと二つを持って出て行ったとも考えられるが、二つという言葉を使う意図的な必要性による結果とも考えられる。二つという言葉の使用は、ここで終わらない。

“ふたきれのみかげせきざい”、“雪と水とのまつしろな二相系”、“おまへがたべるこのふたわんのゆきに”も二つという数字が強調されている。

上に登場するくだりからも二つという単語が頻繁に登場している。これは意図的な作家の単語選択とみられ、もちろん、この二つは賢治とトシ子の二人の暗示として解釈するのに抵抗感がない。最も愛し、支えられた妹トシ子の死をきっかけに、賢治の思考が転換する段階に達する。

「永訣の朝」に続いて「松の針」では、一人で行ってしまう部分を強調している。一人で逝く妹トシ子に一

13) 『校本宮沢賢治全集』第二巻, pp.138~140.

14) 『校本宮沢賢治全集』第二巻, pp.141~142.

15) 『校本宮沢賢治全集』第二巻, pp.143~145.

緒に行こうと悲願する心情を内包している。“ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか”、“わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ”、“泣いてわたくしにさう言ってくれ”と賢治は、トシ子の死を目の当たりにして、痛烈に一緒に逝くことを望んでいるが、その可能性を失ってしまい、それを認めて気づく過程の悲しみを示している。

「無声慟哭」でも“おまへはひとりどこへ行かうとするおまえ”、“信仰を一つにするたつたひとりのみちづれ”と断定している。たった一人の道づれという表現を妹に使用している。賢治の家は、浄土真宗を信仰する家庭であり、その中で賢治とトシ子だけが法華経を信奉する一蓮宗の信者であった。宗教的な傾向が強い賢治に自分と同じ信仰を持つパートナーであるトシ子は、自分の人生を通じて、大きな意味を持つのは必然である。

トシ子の死に直面して書かれた上記の3編の詩の中で、切なげに呼ぶトシ子、“おまえ”という呼称が頻繁に登場するのだが、これは、トシ子の死に対する痛烈な悲しみが伝わってくる箇所でもある。トシ子は賢治と信仰を一つにする人生のパートナーとして賢治の生涯と創作活動に深く関係しており、積極的に賢治と共存し、また依存している関係である。

V. 賢治の初恋と最後の愛

1. 初恋のミネ

賢治は、1914年3月、盛岡中学校を卒業した後、肥厚性鼻炎の手術のために岩手病院に入院する。手術後の発熱によって退院が遅れて5月ごろ退院することになる。入院中に会った看護師が高橋ミネ(1893-1971)¹⁶⁾である。初恋の人である看護師ミネに対する賢治の心境は彼の詩に残っている。

十秒の碧きひかりは去りたれば / かなしく / われは又窓に向く¹⁷⁾

賢治の思いは、看護師ミネが毎日病室に来て賢治の手を取って脈拍をチェックした時、その瞬間を心の中で数えて10秒と表現した詩によって解釈することができる。賢治は、心の中で青く輝く10秒が過ぎれば、自分の気持ちも伝えることができず、やるせない心境で窓を眺めるしかすべがないのである。発熱により退院もできず、18歳の賢治は、次のように憂鬱さを表している。

16) 岩手県出身、大きな野菜の店をする家の娘と伝えられている。1914年岩手病院で働いており、その後は新設された札幌鉄道病院に派遣され、3年間務めた後、岩手病院に戻ることになる。1929年7月7日に北海道で伊藤正と結婚した。賢治は後日、彼のノートで最初の恋人としてミネを表現している。(境 忠一、『宮沢賢治の愛』, 1978, TOMO選書, p.20.)

17) 『校本宮沢賢治全集』第一巻, p.123.

たんぽぽを / 見つめてあれば涙湧く / あたま重きまま / 五月は去りぬ。¹⁸⁾

賢治の初恋は、相手に気持ちを表現することもできず、親の反対で終焉を迎える。看護師ミネに自分の気持ちを伝えずじまいであった純粋な初恋は、始まりも終わりもないつらい思い出だけを残すことになる。誰もが青年期に綱渡りのような恋を経験するとしたら、賢治は初恋を通して、美しい記憶よりも親の反対で自分の弱さを悟り、作品の中で永遠に自分と一緒に寄り添う相手を探していたのかもしれない。

すこやかにうるはしきひとよ病みはて々わが目は黄なり狐に似ずや¹⁹⁾

賢治は退院後、自分の初恋の感情を表現する上で、情熱的であったり、心の穏やかさを表現する詩は少ない。むしろ危機感、失意、喪失感、不安感など、自分の初恋が片思いで終わらなければならない苦しみ、葛藤、失望、煩悩などの彼の内面を吐露することになる。退院後、精神的にも肉体的にも不完全な状態の自分の感情を対象にするのである。片思いの相手と意思疎通もできず、親からも認められずに終わったことが、賢治の作品には初恋の感情を込めた詩が少ない理由であろう。

「銀河鉄道の夜」が銀河の中を走る鉄道という現実と非現実的な世界の中で鉄道が登場する作品であるならば、「シグナルとシグナレス」は、実在する軽便鉄道を素材に作品を展開している。同時に主人公のシグナルとシグナレスも実在の人物であり、現実の世界での賢治の感情を表現した作品であると言える。この作品を通して賢治の初恋の人として知られている看護師ミネを連想することができる。賢治にとってミネは、親に結婚したいと伝えた最初で最後の相手だからである。もちろん、18歳のまだ成熟していない時の判断なので、単なる初恋と片付けてしまうことがある。しかし、この作品を通して初恋ミネとの関連性を見ることができる。

「シグナルとシグナレス」は、主人公のシグナルとシグナレスが軽便鉄道に擬人化されている。いつまでも並んで走っている鉄道のレールは、初恋ミネとの賢治の感性を描いた作品ともいえる。

彼の様々な作品には、自然や人間、物質の一つ一つに対する愛をテーマにしていると解釈できる作品は数多くある。しかし、さまざまな愛の感情とは別に、男女間の感情を扱った作品は、賢治の童話作品の中では珍しい。この点でこの作品は、男女間の嫉妬の感情を表わした作品と解釈することができる。

賢治の作品には、多様なテーマの中でも鉄道を素材に扱った作品が多い。代表的な「銀河鉄道の夜」をはじめ、その他、多数ある。²⁰⁾「銀河鉄道の夜」の主人公ジョバンニはカムパネルラをパートナーとして銀河鉄道の旅をする。先に論じたように二人の関係を賢治とトシ子、賢治と保阪に解釈することができる。ジョバンニにとって異性ではなく同伴者としての存在であるカムパネルラが難破した船に乗り込んだ少女と楽しく会

18) 『校本宮沢賢治全集』第一巻, p.128.

19) 『校本宮沢賢治全集』第一巻, p.124.

20) 例えば、上記の「シグナルとシグナレス」や「氷河鼠の毛皮」、「青森挽歌」、「岩手軽便鉄道の一月」などがある。

話する姿を見て、本当にいつまでもどこまでも共にする人はいないのかと苦しんでいる。

ジョバンニは、嫉妬の心を表現している。列車内でジョバンニは、異性に関心を持たれない少年として設定されている。いつまでもカムパネルラと一緒にいたいジョバンニの姿は、異性への感情に移入されることを拒否している意志でもある。これらの同伴者としての関係で、どこまでもいつまでも一緒に行きたいという祈りは異性的な関係への発展を望んでいないと見ることができる。地上に一人で帰ってきたジョバンニは、カムパネルラが死んだという事実を認めるが、旅行中のジョバンニの成長は、同伴者として同性から異性への発展まで成長していないままに終わっている。これはまた、異性としての関係の発展にならなかった女性との関係との関連性を見出すことができる。

後に言及する高瀬露の手紙を通して、賢治は結婚について積極的でなかったことがわかる。しかし、初恋ミネに会った1914年当時の賢治は、結婚について懐疑的ではなかった。賢治が結婚に対して考え始めるのは、賢治が18歳で岩手病院に入院した時に会ったミネに恋心を抱き、それが初恋となったことがきっかけとなる。退院後に結婚の意志を明らかにしたが、まだ幼いという理由で父親が反対して実現できなかった。叶えられなかった初恋の後、晩年になって再び真剣に結婚を考える機会が訪れる。

2. 最後の愛、チエ

賢治は、1928年6月12日から14日までの3日間、伊豆大島に住んでいた友人、伊藤七雄²¹⁾の招待で大島を訪問する。その当時、伊藤は大島に農芸学校を設立しようと計画し、土壌の調査とアドバイスを賢治に依頼する目的で招待したのであった。伊藤家は水沢町の豪農で以前から賢治を伊藤七雄の妹チエの結婚相手と考えていた。したがって、招待の理由には、農芸学校の開校と妹とのお見合いもあった。

この頃の賢治の踪跡を辿ると、6月7日には仙台、水戸、東京へ旅行し、浮世絵観覧と演劇鑑賞した後、6月8日には上野、そして6月12日に大島へ到着し、6月14日には大島を出発、6月17日には築地小劇場に到着し、6月24日に花巻へ帰郷する。²²⁾6月頃の岩手は田植え、農業用水の確保などで忙しい農繁期で梅雨も終わる頃である。賢治は、これらの忙しい農繁期であるこの時期に大島を訪問する。

この時期の賢治は、作品活動もほとんどせずに農繁期にも関わらず、大島に向かっていることを見ても、何かに集中していたのかが分かる。農民のよりよい生活と幸福を願い、下根子に居所を移し、賢治の農業に関する知識を活かして周囲の農民に稲作指導をしながら約2年を過ごしたが、思い通りにいかなかったことに賢治は悩んでいただろう。このような悩みが大島行を決行した一つの要因になったかもしれない。しかし、6月頃であれば、農民たちにとって非常に重要な時期であり、そのような時期に2週間も不在したのは、普段の賢治の姿から推測することは困難である。

21) 岩手県水沢町出身、富農の息子で労働党に所属していた。ドイツ留学中の結核にかかって帰国する。農民を救済しようと努力し賢治とともに、法華経に傾倒して布教活動をする。妹チエを賢治と結婚させようとしたが、結ばれなかった。

22) 佐藤泰正編、『宮沢賢治必携』『別冊国文学』No.6, 1880, 学灯社, pp.80~81.

そして、実際にお見合いで会った二人はお互いに惹きつけ合い、その感情を賢治は自分の作品に表現している。しかし、結婚の話まで進展しないまま七雄が他界したため、二人は其々の場所で各々の人生を送ることになる。

大島紀行をスケッチした「三原三部」²³⁾という作品群には、賢治の他の作品では表現されていない女性の妖艶な雰囲気を感じることができる作風が印象的である。

南の海の/南の海の/はげしい熱気とけむりのなかから/ひらかぬまゝにさえぎえ芳り/つひにひらかず
水にこぼれる/巨きな花の蕾がある²⁴⁾

この作品は、三原山に中心とした3部作の詩でその当時の心境を吐露する詩に代表され、“咲かない大きなつぼみ”という表現で代弁される女性こそ、まさにチエそのものである。“巨きな花の蕾”という句では、チエを連想させ、また、詩の中の“あなた”という表現を通して、自身の恋愛感情を表出している。

1928年に賢治は、当時、岩手新聞社に勤務していた森莊巳池を訪ねて、結婚に関する相談をする。“伊藤さんと結婚するかもしれませんといわれ、けれどもこの結婚は世の中の結婚とは一寸ちがって、一旦からだをこわした私ですから、日常生活をいたわり合う、ほんとうに深い精神的なものが主になるでせう。”²⁵⁾ という自分の気持ちを打ち明ける。

結婚しようとしていたチエは結核にかかった兄の看病をするが、兄を慕う妹の姿、すなわちチエの中に自身の妹のトシ子の姿を見たかもしれない。また、賢治も結核を患っていたし、死んだトシ子の介護をした経験の持ち主としても通じる所があったのである。

しかし、その年の8月、賢治は、過労と栄養失調が原因となって花巻病院に入院することになる。12月には、急性肺炎へと病状が悪化し、結婚を考える余裕がなかっただろう。しかし、1930年には、やや健康状態が好転した為、1931年、東北採石工場の技師として働けるようになった。賢治は18歳で入院した時、肺結核の初期症状であった。それゆえ、結核菌が結婚相手にも伝染し、いつ脅威的な存在になるかも知れないという恐ろしさが賢治の内面に存在していた。このような身体的な要因が異性に対する積極的な行動や結婚の障害になっていたことは否めない。チエは賢治の生涯の中で、大人になって一度だけ本気で結婚について積極的に考えた女性であったと言える。

23) 『校本宮沢賢治全集』第六巻, pp.7~28.

24) 『校本宮沢賢治全集』第六巻, p.10.

25) 森恭子, 「青年期心理とアイデンティティの形成過程—宮沢賢治の伝記資料と作品を通して—」『瀬木学院紀要(4)』, 2010, 愛知みずほ大学, p.41.

Ⅵ. 結婚しない賢治

賢治は、上記でも述べたとおり、性は消耗的なもので、愛とは別のものと考えた。また、愛と結婚も別のものと考えた。もちろん、ミネとの初恋を結婚につなげていていた時期はあった。しかし、それは、父の反対で砕かれ、雲散霧消となり、賢治は、自分の人生において別の意味での愛がさらに大きな意味を持つようになる。賢治が抱いている愛の意味が結婚とは結び付かなかったため、彼の人生に結婚はなかったかもしれない。

賢治を熱烈に片思いし、求愛した女性も存在する。この女性は、トシ子に通っていた花巻高女を卒業し、教員資格を取得して小学校に勤務していた高瀬露である。彼女は、賢治より5歳年下で羅須地人協会の近くに住んでいた。賢治は、初めてこの女性と出会ったときに自分が企画していた演劇に出演させようとし、協会員も良い反応を見せた。しかし、積極的な態度で賢治に関心を見せると、賢治はひどく当惑し、その女性が協会に来ないよう自分はハンセン病であると嘘までついた。しかし、その嘘に対して彼女が結婚して生涯看病するという姿勢を取ると、賢治は負担な気持ちを打ち明けた。

1927年、森莊已池は、羅須地人協会を訪問した際に、このように回想している。

私は一人一人について特別な愛といふやうなものは持ちませんし持ちたくもありません。さういふ愛を持つものは結局じぶんの子もだけが大切といふあたり前のことになりますから。²⁶⁾

高瀬露に送った賢治の手紙である。この手紙の内容からもわかるように個人的な愛に執着せず、万人への愛という崇高な理想主義を表現をしている。また、女性の求愛を間接的に断る方便とも解釈できる。

賢治が結婚しない理由としては、母と妹の影響、初恋ミネとの果たせなかった愛、宗教的な理由、結婚よりも農民への愛と人生の信念が他の所で内在しており、さらに健康上の理由も挙げることができる。

前述のように賢治の母は、人は他の人のために何かをするために生まれたという話を賢治を寝かせながら、いつも聞かせたという。このような母の影響は、女性という限られた自身の個人的な幸福より、もっと広範囲な人間という存在として意味のある人生を生きようとするのに大きな役割を果たしたと言える。

賢治にとって異性への関心、結婚という人生のテーマにおいては、自分の作品を理解し、人生のパートナーとしての人物であった妹トシ子への限りない愛があったので、さほど結婚への切実な思いを持っていなかった可能性は十分に類推することができる。その愛情はまた、農民への愛情へと変化、発展していく。

また、性が消耗的なものと考えようになった理由としては、藤原嘉藤治から受けた意識的な影響、彼の健康上の問題と関連性を有する。もう一つの理由として、結核という病気は伝染性が強いいため、性については、消極的な姿勢を持つようになったと見ることができる。賢治が22歳の時の徴兵検査で、肋膜炎の危険性

26) 森恭子、「青年期心理とアイデンティティの形成過程―宮沢賢治の伝記資料と作品を通して―」『瀬木学院紀要(4)』, 2010, 愛知みずほ大学, p.40.

があり、結核菌の保菌者だということで兵役免除の判定を受けた。自分の体が正常でないという事実は、若い賢治にとってかなりの心理的な負担として作用していただろう。その当時、不治の病と考えられていた結核が彼の精神世界を宗教への方向に強く導いた要因の一つと見られる。

賢治は、生涯一貫して女性経験がなく禁欲的な生活をしてきたため恋愛作品が僅少であることは、宗教的な信念にも理由があると推察する。しかし、仏教だけでなく、多数の宗教で禁欲的な生活を追求する一方、賢治が信奉していた国柱会は結婚が許可され夫婦関係を社会の根本にすえてあったことから、宗教に起因しているとは見難い。したがって、禁欲を追求するという宗教意識による影響ではなく、自身より他人の身の上を思慮し、衆生のために行きようとしていた信仰から来る他愛に起因するとみることができる。

このように、青年期の純粋な初恋の相手のミネとの果たせなかった愛、人生観に対する信念、人生の目標が他の所に存在、農民への愛などが結婚を選択していない要因として作用したという見解に至る。また、生涯を通じて最後の恋人と見ることができる伊藤チエと縁談のあった当時の賢治は、農民の救済に力を入れていた時期である。森荘已池に結婚するならばチエとしたいと言っていたことから、かなりの好感を持っていたことは明かである。しかし、その当時の賢治は、健康上の理由、農民救済を優先順位に置いて仕事と結婚を並行することに難しさがあったといえる。以上、様々な面から賢治をクローズアップしてみた。

VII. おわりに

以上、賢治の一生を通じて彼の意識の中にある性や愛と結婚、また、賢治の生涯に大きく影響をおよぼした4人の女性ともに彼の作品との関連性を考察した。

賢治の童話は、児童を対象にしたジャンルであると断定することができないため、大人の童話と話題にされたりする。賢治は女性と交際した痕跡が残っていない為、賢治が童話という枠の中で表現しようとする男女の話には、想像力に加えて、体験を描くには多少無理な部分があるのは否めない。

しかし、本文で論じたように賢治は、春画に非常に興味を持っており、また、大量の収集家としても知られている。春画の種類においても広重、北斎の絵よりは歌麿、春信、豊国の絵を好んだ。この点に注目した場合、性と女性に対する関心がなかったとは言い難いのである。

賢治はトシ子の死を目の当たりにするが、持病が同じという理由だけでも妹の死は、普通の人が感じる悲しみの深さとは違っていただろう。このような体験がなければ、「銀河鉄道の夜」という作品が誕生しなかったのではないかと推定する。また、その作品に登場する世界が、現実の世界として実感できるように、読者に伝えることができなかったに違いない。このような体験は、リアリティーな死後の世界の作品を描くのに大きな役割を果たしたが、個人的な幸せを実現する上では、大きな障害になったとという見地に至る。

先に述べたように、藤原嘉藤治は、賢治が結婚したいという話を知人らによくしたと回顧している。それ

にも関わらず、賢治が、結婚しなかった理由として4人の女性、すなわち母と妹の影響、ミネとチエとの結ばれなかった縁、さらに農民に対する愛と作品に昇華された情熱、そして、宗教的な信念と人生の目標が日常の幸せより利他的なところに存在していたという事実、また、それに加えて健康上の理由を彼の作中から探り、深察した。

〈参考文献〉

- 宮沢賢治、『宮沢賢治全集』(全8巻), ちくま文庫, 1989.
- 秋枝美保, 「宮沢賢治と現代文学その3 - 「銀河鉄道の夜」と「世界の中心で、愛をさけぶ」における死生 観」『福山大学人間文化学部紀要』8, pp.1~17, 福山大学, 2008.
- 池川敬司, 「宮沢賢治の初恋と短歌 - 不可解な歌をめぐる -」『国文学』91号, pp.213~223, 関西大学学会, 2007.
- 梅田鉄夫編, 『宮沢賢治 第10号(記念増大号) - 河合隼雄「愛とファンタジーの深層心理」』, pp.199~204, 洋々社, 1990.
- 太田昌孝, 「宮沢賢治研究3」『人間文化研究第3号』, pp.57~69, 名古屋市立大学大学院人間文化研究科編, 2005.
- 岡屋昭雄, 「宮沢賢治論 - 『春と修羅』第一集を中心として -」『教育学部論集』8, pp.69~84, 仏教大学学会編集, 1997.
- 小倉豊文, 「宮沢賢治の愛と性」『新文芸読本 宮沢賢治』, 1996, pp.97~112, 河出書房新書, 1989.
- 押野武志, 『童貞としての宮沢賢治』, pp.31~32, ちくま新書, 2003.
- 黒沢 勉, 「宮沢賢治 妹の死 - 臨終詩編の考察・注解 -」『医事学研究』18号, pp.1~53, 岩手医科大学医事学研究会, 2003.
- 境 忠一, 『宮沢賢治の愛』, p.20, TOMO選書, 1978.
- 佐藤泰正編, 「宮沢賢治必携」『別冊国文学』No.6, pp.80~81, 学灯社, 1880.
- 下家美里, 「「銀河鉄道の夜」の「父」と子」『岩手大学大学院人文社会科学研究科紀要』第17号, pp.87~107, 岩手大学, 2008.
- 中野新治, 宮沢賢治における恋愛と宗教, pp.121~129.
- 中村文昭, 『童話の宮沢賢治』, p.6, 洋々社, 1992.
- 藤井義博, 「宮沢賢治の心象スケッチ - まことのこぼの啓示 -」『藤女子大学QOL研究所紀要』8号, pp.19~31, 藤女子大学, 2013.
- 堀尾青史, 「賢治年譜の問題点 - 堀尾青史に聞く (<特集>宮沢賢治 - 作品から作品へ、ジャンルからジャンルへ)」『国文学解釈と教材の研究』23(2), pp.169~77, 学灯社, 1978.

見田宗介, 『宮沢賢治 存在の祭りの中へ』, pp.83~99, 岩波文庫, 2010.

宮沢清六, 『兄のトランク』, p.89, ちくま文庫, 1991.

森恭子, 「青年期心理とアイデンティティの形成過程-宮沢賢治の伝記資料と作品を通して」 『瀬木 学院紀要』

(4), pp.14~59, 愛知みずほ大学, 2010.

山下聖美, 『宮沢賢治のちから』, p.23, 新潮社, 2008.

* 이 논문은 2015년 5월 27일에 투고되어,
2015년 6월 9일까지 편집위원회에서 심사위원을 선정하고,
2015년 6월 26일까지 심사위원이 심사하고,
2015년 7월 6일 편집위원회에서 게재가 결정되었음.

■ 국문초록 ■

미야자와 겐지와 여성

박 경 연

본 연구는 미야자와 겐지의 일생을 통하여 등장하는 여성이라는 존재를 조명하고 겐지의 인식 속에서 보이는 여성의 위치와 또한 그의 작품에 어떤 영향을 미치고 있는가에 대하여 고찰하였다.

겐지의 일생을 통하여 큰 영향을 미쳤다고 볼 수 있는 여성을 4명으로 집약하여 보았다. 4명의 여성은 2명의 가족과 2명의 연인으로 분류할 수 있다. 2명의 가족은 겐지에게 평생 든든한 버팀목이 되어 준 어머니 이치, 여동생이지만 정신적으로 의지하던 도시코다. 2명의 연인으로는 1914년 겐지의 나이 18세에 이와테병원에 입원하였을 당시 만난 첫사랑 간호사 미네, 1928년 혼담이 있었던 겐지의 나이 32세 때의 치에이다.

어머니의 가르침은 겐지의 유명한 시 「비에도 지지 않고」의 원류를 이루었고, 훌륭한 어머니의 영향이 겐지의 사고를 형성하는데 밑바탕을 이루었다고 보았다.

종교적 성향이 강하게 나타나는 겐지에게 자신과 같은 신앙을 가진 도시코는 인생의 동반자적인 위치를 차지하며 겐지의 인생에 큰 의미를 부여한다. 도시코는 겐지의 생애와 창작활동에 깊이 관계하고 있으며 도시코의 죽음을 맞아 창작한 3편의 시를 통하여 살펴보았다.

겐지는 비후성비염의 수술로 인해 이와테병원에 입원하게 된다. 입원중 만난 간호사가 미네이고 첫사랑이다. 처음으로 부모에게 결혼하고 싶다는 말을 한 인물이기도 하며 시를 통하여 그의 심경을 표출하였다.

겐지의 친구인 이토 나나오는 자신의 여동생인 치에와 맞선을 추진한다. 실제로 맞선으로 만난 두 사람은 서로에게 끌렸으며 그 당시의 감정을 겐지는 자신의 작품에 표현하고 있다. 그러나 두 사람은 결혼이야기까지는 진전되지 못하고 나나오도 죽음을 맞게 되어 각각의 장소에서 각자의 인생을 보내게 된다.

겐지는 결혼하고자 했으나 그럼에도 불구하고 결혼하지 않은 이유로 어머니와 여동생의 영향, 첫사랑 미네와 마지막 사랑 치에와의 이루어지지 못한 인연, 건강상의 이유, 농민에 대한 사랑과 종교적으로 승화된 열정, 인생의 신념과 목표가 일상의 행복보다 타인을 위한 삶에 존재하고 있었다는 부분을 들어 살펴보았다.

[주제어] 여성, 이치, 도시코, 타카하시미네, 이토치에

■ Abstract ■

Kenji Miyazawa and Women

Park, Kyoungyeon*

This study sheds some light on the women appearing throughout Kenji's life and investigates how the status of women in his own cognizance affects his work.

This study narrows women down to four who have greatly influenced him throughout his life. The four women include the two family members and the two lovers. The two family members includes his mother who has been a sturdy and pillar throughout his life and Toshiko, two-year younger sister, on whom Kenji spiritually depends. The two lovers are the nurse Mine, his first love whom he met when he was admitted to Iwate Hospital at the age of 18 and Chiei with whom there was a talk of marriage in 1928 when he was 32 years old.

Kenji's famous poem 「*Not Losing To The Rain*」 originates from what his mother taught him and his great mother's influence has formed the foundation for his way of thinking.

Toshiko, who believed in the same religion as Kenji with a proclivity toward religion, was a lifetime companion and was significantly meaningful to him. She was deeply involved in Kenji's life and his writing as shown by three poems Kenji wrote upon Toshiko's death.

Kenji was admitted to Iwate Hospital to have an operation for his hypertrophic rhinitis. While in the hospital, he met the nurse Mine and she was his first love. He told his parents that he would like to marry her for the first time and his feeling was well expressed in his poem.

His friend Itho Nanao introduced his younger sister Chie to Kenji. On the arranged date, both Kenji and Chie were attracted to each other and how Kenji felt about this date was shown in his work. However, they did not advance to a talk of marriage when Nanao died. The two people led their own life independently at their respective places.

This study examines his mother and younger sister's influence, failed first love with Mine, his health, his love for farmers and his religiously sublimated passion, his belief and goal for the life exist for others' life rather than his own happiness are examined as reasons for his failure to marry anyone against his wish for a marriage, Kenji never married.

[Key Words] Woman, Ichi, Tosiko, Takahasi mine, Itou chie

* Non-tenure Track Assistant Professor, Dankook University

